

## インタビュー

## 「奥田昌道先生が語る、学問・人生・最高裁」

2002年8月14日

奥田昌道

(インタビュー) 平成14年度世話人代表実行委員長 佐賀千恵美

平成12年度世話人代表実行副委員長 樋口紀子

……(前略)……

(先生) ……(中略) ……社会での経験とか弁護士としての経験とかいろんな場を踏んでいかないと仕方ないでしょうけどね。基本的にはやっぱり私は大学を卒業してからすぐにキリスト教の方に行きました。それはもう自分が人間としてぺっしゅんこになつてから行ってますからぺっしゅんこつて言う、原点ですよ、私のね、言うならば。自分の原点はいつもゼロむしろマイナス。そこからキリストに救われて、そこから再スタートをきつたという、それが原点ですから。それはもう人間の弱さつていうのも十分に知つて。

(樋口) その先生のぺっしゅんこことというのはどこで？

(先生) 大学に残つて勉強はじめて、しばらくたつてからです。ドイツのさつきの「法律の」勉強ばかりやつて研究室に閉じこもつて修道院的な生活だった。於保先生に弟子入りして、自分ひとりドイツ語の本なんかを首つ引きで朝から晩までやつて、それが日曜日もなしにずっとぶつ続けでやっていますと、だんだんお前さんそうやつて、勉強ばかりやつてるけど何のためにやつてるの？ お前さんの命は大丈夫なの？とか、お前という人間は何なの？という——悪魔のささやきか何か知りませんよ——そういう今まで味わつたことがないような問いかけが次から次と頭をかすめるんです。きつと僕、精神的にも疲れたんだと思うんですよ。同じことを一か月もやつてごらんなさいよ、だんだん嫌になりますよね、息抜きもしないで。そんなことに疲れもあつたんでしょうけど、何かそういう勉強が手につかないようなことになつて、むしろ人間とは何ぞや、お前は何を求めて生きているんや、お前は何を求めて法律学の勉強してるのとか、ドイツ語を勉強するのは何のためとかね。

(樋口) 自分の中で自問自答されて？

(先生) そうそう。そうするとなんにも答えられないわですよ、自分の中からは。

(樋口) なんだろう？つて。

(先生) はあ、お前は明日の命も分からないんじゃないかとかね。

(樋口) なにしてるんだろうと？



(先生) 自分がだんだん疲れてきていますし、だんだん顔色も背くなってきました。そんなことがきっかけで、ものすごく、自分というものを見つめたのかもしれない。それでもものすごく自分自身に対して不安になったんでしょね。そんなこともあったりして。

(樋口) その、先生が新たにこれでいいんだって歩み始められるきっかけというのは？

(先生) 悩んでいたら一年くらい続きまして、助手生活の二年目の夏休みに入る時です。たまたま、その田中周友先生の研究会ですわ、そこにキリスト教に熱心な田中先生からすごく囑望されていた学生がいたんですよね、市川喜一君という大学院生が。その人は結局、大学を辞めて聖書の道へ行きましたんですけど。その君といろいろ話する機会があつて、夏休み前で研究会が終わって今回でいったん休会になるというので、皆で楽友会館で飲んだりして、食事して雑談したりしてた時にその君だけはすごく真面目なわけですね、他の人と違うわけです。他の人は彼をからかったりするんですけど、それでも真面目に応答してなんです。食事が終わって解散したあと、その君に、実はこんな問題で悩んでいるんだけどあなたはどうか考えられますかって質問したら、キリストのことを話してくれて、彼は夜空の星空の下で顔は輝いている。僕はもう青菜に塩のようなそういう姿ですけど、向こうは輝いているですよ。京大構内をずっと法学部から理学部、農学部の辺りを散歩しながら、色々キリストの話をして三時間くらいぶつとうしてしてくれました。それで僕は心動かされたわけです。それは中身に動かされたというよりも、僕と同じ境遇、いや僕よりも悪い条件のもとにある彼が何でこんなに生き活きと輝いているんだろう、と。彼はまだ将来の身分ははっきりしていません。僕は助手で、順調に行けば将来を約束されている。

(樋口) 恵まれていると、自分の方が？

(先生) 恵まれてる。

(樋口) 自分の方がへこたれてる？

(先生) 自分の方が青菜に塩だね。何の希望もありませんって言うような、人生に対して打ちひしがれている。彼は何の保障も無いのに輝いている。その根拠は何かといたらキリストに委ねきつている、と。人がぼろくそに言うキリストを、聖書を、それを素直に受け入れて、それで輝いている。「明日のこと心配じゃないんですか?」、「なんにも心配じゃありません。キリストは全てを引き受けておられますから」って。こんな境地で勉強できたらいいなあと思つたですね、僕は。僕はもうその頃は「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」という孔子の言葉が大好きで、朝に道を聞きたいのに誰もその道を説いてくれない、それで自分は明日のことを思い煩って、過去を振り返れば後悔、明日を見れば心配事、今日現在は何にも充実できない、思い煩いで。こんな人生って、もう何とかしてもらわないとどうにもならないと思つてたわけですね。自

分で解決できないから。ところが片一方はそうやって光り輝いているわけです。これはもうこの人の言っていることを受け入れて新しく出直すしかないかと素直にそう思った。それが七月七日の土曜日の晩だったんですね。

(樋口) あら、七夕の？

(先生) 七夕の。その翌日、彼がフィンランドの宣教師から託されて——宣教師は夏休みで本国に帰ってる間にいわば代行をやっている副牧師です——小さな民家の一間を借りてやってるわけですよ。いらつしやいませんかって誘ってくれたから行ったんですね。その明るる朝の日曜日は僕にとつて輝いていましたね。それまでは、朝起きたらもう寝覚めが悪い。また重苦しい一日が始まるかと。

(樋口)へえそんなに短い間に！

(先生) 一晚でね。

(樋口) 先生の心の持ち様が変わられて。

(先生) とにかくやつぱり希望の光が差し込んできたわけですよ。キリスト教っていう気持ちでそこに飛び込んでいったわけです。とにかく話を聞かないことには、もっと深く、聖書のことともキリスト教全体のこととも。それには三時間だけのレクチャーではまだ入り口ですから。

(樋口) そうですよ。一番にその方の表情なり、人間性なりに触れられて、僕より境遇が悪いにも関わらず、安定していて心が豊かで落ち着いている。

(先生) 安らかで平安があり喜びがある、輝いている。彼をそうせしめるもの、源は何なんだ、と。

(樋口) そういうところで、先生ご自身もちょっと触れられた時点でもう心のもち様が？

(先生) 僕はもう弟子入りしようと思っただんです。弟子入りして、到底ついていけないものならまたそこで考えるけど、まずそこで飛び込んでいかなないと始まらないと。僕、割にその辺、潔いんですよ。ちょうど、弁慶が牛若丸に降参したでしょ、あの青二才の牛若丸に。大の弁慶が降参したでしょ。僕、弁慶は非常に潔いと思っています。

(樋口) もう最後の刀か何かだったんですね。

(先生) 九九九本まで来たんですよ、後一本なんです。そのあと一本のところで、見事に参ったっていうことで終生牛若丸についていきました。武蔵坊弁慶、あの潔さね。僕は何か本物にぶつかつたらその潔さを持ちたいと思っていました。やつぱり僕にとつては本物が一番大事なわけですよ。偽りの生活はしたくない。それで、

(佐賀) でも先生御自身がすごいやつぱり感性がおりなんですね。

(先生) だったのかもしれないね。

(佐賀) だって、その同じ時間同じように過ごしたところで分らない方もあると思



います、きつと。

(先生) そりゃ、まあそうかもしれないですけど、その時は一対一ですけどね。

(樋口) その時に思われる、わずか三時間くらいで、変わられてそれがきつかけで、

(先生) 翌朝、小さな集まりに行きましてね。

(樋口) もう全然昨日とはうってかわって？

(先生) ちがいますね。はい。

(樋口) 元気におなりになって？

(先生) 元気になったかは知りませんが、朝起きた時に、また一日が始まるわと、そんな嘆きじゃなくて、あつ市川君の集まりに行こうとね。ウキウキといそいそと朝飯も食べないで飛んでいきました。

(樋口) もう奇跡に近いことですね。

(先生) ね、今から思えばね。僕にとつてはごく自然だったんです。

(樋口) 出会う時に出会われた。

(先生) ええ、新しい朝を迎えたという思いです。飛び込んで行きましたね。

(樋口) そうですね。

(先生) まあそんなことがきつかけでね。それから後はいろいろ紆余曲折もありましたけど、やっぱり基本線はそこから新しいところへ踏み出していつて、今度はキリスト教の中のまた本物を求めるという——いろんなキリスト教がありますから——そういうまた次の修行になるわけですけれど、まずはこの世からの脱出ですわね。言うならば今までの閉ざされた世界から飛び出るということがあって、飛び出たなかで本物は何かという、またそれを捜しめる旅路ですね。

(樋口) そうしたら今までお勉強されていた中もやっぱりご自身の中ではもうそのことによつて捉え方とか、いろんなものが見方も違うご自分がありました？

(先生) いや、そんな一足飛びにはいきません、むしろそこでは分裂ですよ。

(樋口) 分裂なんですか？

(先生) それは、自分はキリストの世界を求めている、やってる学問は世俗の学問、

(樋口) はあ、

(先生) これはどうやってひつつくんだらうって。

(樋口) そこから？

(先生) そこからお互い拒絶反応を起こしてるわけですよ、ちょうど臓器移植と一緒にですね、違うものが入ってくることによつてお互い拒絶反応おこすでしょ。だいたいキリスト教っていうのは俗世間の考え方を否定するところから始まっていますからね。

(樋口) そうしたら、違う苦しさが生まれるんですか？

(先生) そうなんです。二つの国籍が出来たわけなんです、世俗人と。

(樋口) その融合が生まれるのが次、

(先生) やっぱり小池辰雄先生っていう方に出会ってそれから、

(樋口) 本物を探して。

(先生) 本物を求めて。小池先生はドイツ文学でね、ゲートとかそういうものを受け入れて割合に職業としての自分の学問とキリスト教が融合しやすい分野なんです。僕の場合は融合しにくい分野ですから、小池先生に相談したって直接の答えは出てこない。

(樋口) 民事の方だから。

(先生) 法学だから。むしろ小池先生は法学が嫌いだって言うような先生だからね。

(佐賀) パンのための学問が法学ですから。

(先生) パンのための学問でしょ。でもね、小池先生がいいこと言ってくれたんですよ。宗教の世界は、これは根つこの世界だと、樹木でいったら。学問というか、理性の働きは空に向かって伸びていく世界だ、羽を広げ枝を広げてずっと見える世界だ。宗教の世界は見えない、地中にある根つこの世界だと。けれども、立派な樹木は立派な根に支えられて初めて立派な樹木に生育する。根が無ければ見かけのやつは必ずどっかで、

(樋口) 枯れちゃうし。

(先生) つぶれる。根つこの世界は方向が反対だから、一見矛盾して拒絶反応を起こしてるようだけれども、ほんとには繋がっているはずだ。だから疑わないで、どまでも追求したまえと。こつちはこつち、あつちはあつちで構わないから。やつてるうちにどっかで繋がる時がくるよ、と。で、他の宣教師なんか相談したら、法学なんてやめて、早くさつきと牧師になりなさいって言うんですもん。

(樋口) 否定されちゃった。

(先生) そうかと思うと、フィンランドの宣教師なんか言っていました。聖書に照らして間違ってる法律は全部直しなさい(笑)。聖書にはなんでも答えがあるはずだから、聖書に照らして間違ってる法律はみな否定して、新しい法律を作るようにしなさい。例えば離婚、あんなものは聖書は否定しているから、現在の民法が離婚を認めているのはダメですか。まあ、その程度の知識なんです、宣教師といえども。カトリックは違うと思うんですよ。もつと深みがあると思うんですけど。僕が接したのはプロテスタントの方で、しかもいわゆるルーテル教会とかそういうオーソドックスに反抗している少数派の北欧から来た宣教師の群れだった。その代わり情熱的なんです。ものすごく情熱的な面がある。私たちが求めているのはある程度の情熱的なものでないと、あの当時の僕としては、おとなしいキリスト教では理屈になっちゃうから駄目だったと思うんですね。もう現実を変革するくらいの意気込みを持って奇跡もばんばん伴うような、それくらいの、あつと驚かせるくらいの迫力がないと、僕はやっぱりその当

時としては受け入れにくかったでしょうね。で、またそんなのが現れてきたんですね、そのさつき申し上げた年の夏休みに。

それでその夏休みにアメリカからやって来たオズボンという若い宣教師が伝道大集会を大丸の横の空き地で一か月くらいぶっ続けにやっただんですね。その人はものすごく所謂神癒の賜物を授かっている人で、いかなる病気であつても私が祈れば癒されるとの信仰をもつて、それで東南アジアとかで大成功を収めて日本に乗り込んできた人なんです。そんなものに触れたから私はびっくりしましたね、正直。それは私にとつてはいいことだつたと思つてます。後にはそこからまた脱却したんですけどね、私は。それはあの人においては一つの使命であり賜物だけれども、それが全てでは無いっていう、そういう風に位置付けをしましたけれども。その時はやっぱり、すぐくリアルティーに富んでましたから生々しかったです。あー、キリストの力つていうのはこんなにすごいのかと思つて。今まで閉ざされた世界に住んでいたと、突き抜けた世界とはこんなにすごいことが二千年前と今と変わらなく現象面でも現れてくるというのが、まざまざと目の前で見せられてね。驚きから始まらないといけませんわね、すべて。

(樋口) 感動と。

(先生) 驚きと感動と。初めは疑いの目で見ていても連続して毎晩毎晩いろんな奇跡的な癒しの業が展開されますと、これは自分の狭い知識でもつて否定してはいけないと思ふようになった。しかもその宣教師は本当に我を忘れて涙を流して病人のために全身で祈つてるといふ感じでしたね。それには感動しました。敵国も味方も何も無い。人種の差別も無いと。要するに自分が乗り込んできた日本の京都という地で、病める人のために手を置いて真剣に祈っている。涙を流して祈っている。それで祈ってもらった人は本当に輝いて帰っていくんですね。耳の聞こえなかった人が実際聞こえてますっていうんですよ。そんなことを他の人に言ったら、お前サクラに騙されているんだって言う。田中周友先生などは、あの聖書に書いてあることはみな嘘だつて言うのですよ。でも僕は実際実物を見ると、そうは思えなかつたんですね。松葉杖ついできた人が松葉杖を捨て去つてスタスタと歩いて帰る姿とか。サクラだサクラだつて言うんだけど、僕はとてもサクラだとは思えなかつたし、舞鶴辺りから汽車に乗ってきましたとかね。やっぱり聖書に書いてある通りなんですよ、そういう点は。で、疑つてかかっている人は駄目なんです。素直にそれを受け入れないと。

(樋口) やっぱり信ずるものこそ救われるという。

(先生) そうそう。その通りだつたんです。その言葉がそこで起こつてましたんで、なるほど聖書に書いてあることは、もつとレベルは高いかも知れないけれども、少なくとも同質的なことがこの若い三十代のアメリカの宣教師を通してここに現されているなと思つたんです。それで、その宣教師の言うには、そういうことは何も自分に独特



のものじゃない。そう信ずるものには全て起こることである。およそあらゆる教会に起こっていないければ嘘であると、こう言うんですね。あなた方が訪ねていく教会でそういうことが全然起こっていないなら、その教会は偽物だと思いなさい、ってやるわけですよ。僕は本気でそう思っちゃってね。そのくらい、すごい迫力に溢れていたから、そこで僕は今までの否定的なものが全部ひっくり返ったんですね。僕ももう、その時はいろいろ悩んでいたせいで身体があつちこつち悪いわけです。もう保健診療所に行ったらカルテがこんなにたまっているわけです。薬は貰うわ、何するわけね。それがその宣教師は、何日かの後には、もう皆さん毎晩ここでこういう集会をやっているとキリストの霊が満ちてるから、私がいちいち手を置いて祈ってあげなくても、皆さんが本気で真剣に自分で自分の患部に手を置いて私と祈りをもにいなさい、もしたら癒されますからと。それで僕もそうしたんです。そしてもう全然どうもなくなっちゃって、それからもうびたつと診療所通いをやめました。薬には頼らない。もう薬にさよならってこと。心配事さよなら。それで立ち直って、それから勉強始めたんです。

(樋口) だから要するに俗に言う「病は気から。」って言うので、

(先生) そういうことですね、僕の場合は。

(樋口) 気持ちの持ちようで。

(先生) それが強かったでしょうね。

(樋口) 別にウイルスや何かが入って自分を侵しているわけじゃあなく、自分で自分を、

(先生) 自分で自分を痛めつけていたんでしょう、消極的になってね。

(樋口) 自分を責めて、

(先生) ふさぎこんでて、夜は眠れないしね。

(樋口) 自分をいじめちゃってたんですね。

(先生) そうそう。うつ病みたいな状況になってたわけですよ。そこからパッと光が入ってきて脱却しましたからね。

(樋口) だから関わり方というか捉え方というか、そういうものが全て先生の中で変わられて。

(先生) 変わったですよ。それからまあさつきの学問との関係においては長い道程がいるんですけど、その後はこの先生と出会ったんですね。三年位あとですよ。三年後の一九五九年にこの先生が京大へ講演に来られたんです。

(佐賀) 小池辰雄先生ですよ。

(先生) それが次のステップです。この方も学者の道をいかれた訳ですから。宣教師さんや牧師さん達は、とにかく今の職業を捨てて神様の道に従いなさいと、こう言う捉え方ですから。神に身をささげることが職業を捨てることであると、そういう風に言

うわけです。そしたら、少しキリストに熱中しだした人を捕まえては、あなたは神学校に入って神の国を伝える仕事に就きなさい、それが思召しですと、こう言うわけですね。僕はそれはおかしいと思った。そんなに皆が皆、牧師や伝道師になったら、この世の仕事を支えてくれる人はどうなるんだと、そう思っていたわけです。小池先生にぶつかった時に先生も私と同じようなお考えだったものですから。だいたい無教会っていうのはやっぱり平信徒伝道を理想としていますから、つまり聖職者と俗人の区別をしないんです。平信徒の中に聖なるものが宿るといって、つまり降りていくほうですよ。

(樋口) なるほどね。

(先生) その代わりしんどいですよね、二足わらじだから。特にリーダーはね。

(樋口) いや、でも私ね、世間一般に言うお力のある方って言うのはやっぱりいろんなレベルに合わせられると思う。降りていけると思う。

(先生) うんうん。

(樋口) で、もとの自分にも戻れるし自分も見失わないし、相手の方のレベルに合わせてるんだけど、やっぱり中途半端だと自分を見失ってしまうっていうか。

(先生) それはあるかもしれませんが。それは天から授かったものかもしれませんが、僕はそんな自分で何かがあるなんて思ったこともありませんし、ほんとのところ。ゼロ、マイナスからの出発ですからね。

(樋口) だからいつもそれは奥田先生が心がけてられる、それがやっぱり控えめというか。

(先生) いつもそう思ってますもん。第一そうやって、がらつと自分の人生が変わったときに、そのときはキリストが全てであるし、キリストが喜んでくださる人間でありたいと思いましたがね。学問を捨てろといわれたら、はい、と捨てるつもりでした。その時は。

(樋口) いわゆる自己否定ができるというか、

(先生) そうです、そうです。だから学問を捨てろといわれたら、つまり、牧師が言うようにこの世の職業を捨てて神の道にと言われたらそうするけれども、ただしそれはそれなりのはっきりした確信があつて、はっきりと御声を聴くならば、そうだけど、宣教師が言ったから、はいそうですかでは、僕は納得できないと思つてね。それでその時を待つという気持ちで、しかしもう学問に携わっていても学問にとらわれない、職業にとらわれない、これはもう自分のものじゃない。自分のものだと思えば執着心が出るでしょ。

(樋口) もう、しがみつかなかない。

(先生) しがみつかない。むしろ神様が、キリストがそれを望んでくださっている限りはそれに携わるけれども、それまでって言われたら、



(樋口) 自然と道が開けてくる。

(先生) うん、うん。もうこの学問の道はこれまででつておっしゃれば、ぱつとそこで離れるっていう、いつもその気持ちは持つていました。一時ね、大学紛争で大学が一時、封鎖されたりとか、もう授業が中断されるわ、研究ができなくなるわつてそういう時、非常にみんな苦しんだんですね、特に大学の先生がたは。その時に僕は苦しまなかつた。どうせ僕は初めつから自分の研究とか自分の何かつていうのは持たないつていうプリンシプルできてますから。これで終わりだつたらこれでいい、と。しかし今、自分が大学に籍を置いて、今、大学の一員として何が大切かつていうことだけはやろうと思つてね。だから、それが学部長を助けることであつたり、紛争の処理に当たることであつたりすれば、二年間たとえ研究がストップしてもそれは構わないと。で、二年間終わった時に自分としてブランクがあるからもう教授としてふさわしい実力が無くなつていれば、その時は辞めたらいいと。あの紛争の時に大学の運営とかそういう方面の仕事をやりながら、研究も続けてやつてられた多くの方が健康を害してますね、精神面あるいは肉体面で。

(樋口) だから、先生はもう全然、現実にとだわらずに常にもうオールチャンネルを開いて。

(先生) それはやつぱりキリストですよ。それが全てだと思つているから。

(樋口) 全部を受け入れてられるのでこれをやらなければならぬとかこだわりもありませんし。

(先生) ただあんまり人に迷惑掛けちゃいかんかと、思いましたよね。特に出版社から、原稿なんかで、自分ばかりが遅れてそれは申し訳ないなあと思つたら、誰かがその時、病気になつてその方も書けない、ああ良かったあつて。向こうから言つてくる、こういう先生がこういうご都合でちよつと締め切り延期しますからなんて。はあ助かつた。そんなことありますね。人に迷惑は掛けたくないつていうその気遣いは大事でありますけれども、自分がどうなるかつていうことについては何にも思わない。それは僕にとつて幸せでしたね。執着心がなくなつたから。……(後略)……

『インタビュー「奥田昌道先生が語る、学問・人生・最高裁」』から抜粋転載)

